

科学と宗教の次元的区別をめぐって

2017. 02. 25 Sat.

岩田 成就 (IWATA Shigenari)

立教大学兼任講師

0 はじめに

科学と宗教はどのような関係にあるべきか。キリスト教神学者ルドルフ・ブルトマン (Rudolf Karl Bultmann 1884-1976) の思想を手がかりに考察する。

●科学と宗教の関係

・キリスト教の中での議論¹

・科学者はどうとらえているのだろうか？

・引用1 益川敏英 積極的無宗教²

益川氏が否定する「宗教」＝当面の観察や理論で説明が困難な自然現象について、「神」という科学的な営みを越えた仮定を持ち出すことで、それ以上の科学的な探求をやめてしまう姿勢

・引用2 佐倉統 神秘こそ宗教の第一歩³

¹ このテーマに関して、ここ約20年間に日本で出版された主要な著作は以下のとおり。()内は原著出版年。

①稲垣久和『知と信の構造：科学と宗教のコスモロジー』ヨルダン社、1993年

②野呂芳男『キリスト教と開けゆく宇宙』松鶴亭(出版部)1996年

③W. パネンバーク『自然と神：自然の神学に向けて』深井智朗ほか訳、教文館、1999年(1993)

④J. ポーキングホーン『科学と宗教』本多峯子訳、玉川大学出版部、2000年(2008)

⑤J. ポーキングホーン『自然科学とキリスト教』本多峯子訳、教文館、2003年(1998)

⑥A. E. マクグラス『科学と宗教』稲垣久和ほか訳、教文館、2003年(1999)

⑦I. G. バーバー『科学が宗教と出会うとき：四つのモデル』藤井清久訳、教文館、2004年(2000)

⑧A. E. マクグラス『神の科学：科学的神学入門』稲垣久和ほか訳、教文館、2005年(2004)

⑨芦名定道『自然神学再考：近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年

⑩J. モルトマン『科学と知恵：自然科学と神学の対話』蓮實和男ほか訳、2007年(2002)

⑪A. E. マクグラス『「自然」を神学する：キリスト教自然神学の新展開』芦名定道ほか訳、教文館、2011年

² 「益川 僕が積極的無宗教なのは、『神』というのが、自然法則を説明する時によく出てくるからです。たとえば、『雪の結晶には一つとして同じものがない。実に不思議だ。なぜこんなものが存在するのだろうか』と誰かが言った時、『神様がお作りになったのだ』と、神を引き合いに出して説明するのが、いちばん手っ取り早い。……(中略)……僕が言う積極的無宗教とは、『雪の結晶は神様がお作りになったのだ』と言う人達に対して、『その答えを神様に求めなきゃいかんほど、あなたの理性は単純なのですか? それぐらいの答えだったら、いくらでも考えられますよ』と、異議を申し立てることなのです。』(山中伸弥・益川敏英『「大発見」の思考法』文春新書、2011年、184-185頁、下線は引用者による。以下同様)。

³ 「オウム事件がテレビをにぎわしていたころ、いわゆる『オウム・サイエンティスト』の問題について質問を受けた自然科学系の大学院生たちは、テレビのインタビューに答えて、異口同音にこう言っていた。いくら科学的に調べても解決できない神秘が残ってしまうので、オカルトや宗教に惹かれることもしばしばある、と。大学で教育に携わるものとして、これほど衝撃的な発言はない。彼らはいったい何を考えているのか! 彼らの指導者はいったい何を教えているのか! わからないことがあるからこそ、科学で調べるのではないか。自然が神秘的であり謎だらけだからこそ、科学が面白いのではないか。」(佐倉統「百年後、科学は社会を支える基盤たりえているか?」『オ

解決できない問題の答えをオカルトや宗教に求めようとする傾向への嘆き。そのような謎の解明に努めるのが科学の務めである

- ①両者とも、科学の営みに「神」という仮定を安易に持ち込む姿勢を非難する。→同感。
- ②しかし、「科学で調べても解決できない神秘」には、将来解決可能なものと、原理的に不可能なものがあるのではないか？ 後者は科学の次元ではなく宗教の次元に関わるのではないか？ (ex. 「なぜ私は生まれてきたのか？」という問い) つまり、科学と宗教は異なった次元にあるのではないか？

引用3 高橋英利 入信動機⁴

- ③両者とも、科学と宗教を同じ自然現象を説明する次元で捉えた上で、前者を採用し後者を退ける。→疑問

●神の出る幕

- ・科学と宗教にはそれぞれ出る幕(役割)があり、それを間違えると問題が生じる。両者はどのような出る幕をもち、二つの幕はどのような関係にあるのか？
- ・この問いへのキリスト教神学からの一つの解答として、ルドルフ・ブルトマンの「非神話論化」を取り上げる。その発想の基本にある「次元的区别」の考え方は、「科学と宗教の関係」を考える上での手がかりとなるだろう。

1 ブルトマンの次元的区别

●ブルトマンの非神話論化

- ・ブルトマンはドイツの新約聖書学者であり、「どのようにして現代人は新約聖書を有意味なものとして受け取ることができるか」という解釈学の問題を考えた神学思想家。『共観福音書伝承史』(1921)、『イエス』(1926)、『新約聖書神学』(1948-53)など⁵。1941年の講演「新約聖書と神話論」⁶で、「非神話論化」(Entmythologisierung)を提唱した。「非神話論化」とは、聖書の神話論的な叙述を文字どおり受け取ることを拒否し、人間の実存についての洞察として理解する聖書解釈の方法で、その発想の基礎をなす「次元的区别」(野呂芳男)は、科学と宗教の関係の問題を考える場合の一つの有力なモデルとなるのではないか⁷。

●ブルトマンの主張

- ①新約聖書の叙述は古代の三階層の世界像を前提としている。

図1 三階層の世界像

ウム真理教事件：宗教学者・科学者・哲学者からの発言』仏教・別冊、1996年、196頁)。

4 「<科学>をやっている、どうして人間は生まれ出ることには答えてくれない。……(中略)……自分が本当に知りたいのは、宇宙がどうなっているかを写真に取ることもなければ、分析機で調べることもない。自分がどうしてこの宇宙、この世に生まれてきて、どうしてこのようにとらえているんだろうと思うようになった。そうなってくるとやはり避けて通れなかったんです。宗教に対して。それでオウムに学んでみようという気になりました。」(対談「虚無感からの脱出」『imago』1995年8月臨時増刊「オウム真理教の深層」、11頁)

5 ブルトマンの主要著作の邦訳は、『ブルトマン著作集』全14巻、新教出版社に入っている。

6 R. ブルトマン『新約聖書と神話論』山岡喜久男訳、新教出版社、1954年。

7 野呂芳男『民衆の神 キリスト』ぷねうま舎、2010年、101頁以下を参照。野呂芳男(のろ よしお 1925-2010)は、キリスト教神学者。牧師。ジョン・ウェスレーの研究、および「実存論的神学」の提唱により知られる。その後キリスト教の土着化、民衆仏教徒との対話と取り組んだ。『実存論的神学』(1964)、『神と希望』(1980)、『キリスト教と民衆仏教』(1991)など。野呂芳男ホームページ <http://http://noro.eucharistia.tokyo> を参照。

引用4 新約聖書の叙述の一例 (マルコ福音書1章9-13節)⁸

②現代人はこうした古代の世界像を受け入れることは出来ない。

③受け入れ不可能な叙述を排除した上で、それによって言い表されている人間の実存理解を取り出す。その際、

M. ハイデッガー (Martin Heidegger 1989-76) の「現存在の実存論的分析」を用いる⁹。

引用5 人間実存の分析 ブルトマン 『新約聖書と神話論』1954年、61頁)¹⁰

図2 新約聖書とハイデッガー 「霊と肉」

④ただし、ハイデッガーが人間の本来性は自己の決断によって獲得されると考えるのに対して、新約聖書は人間にはそのような力はなく神の救いの行為が必要だと考える。そこに、新約聖書独自のメッセージがある。

・ブルトマンの非神話論化を可能にしているのは「次元的区別」である。これらの諸次元を区別すべき。

①世界像の次元 世界の客観的なありようを記述する 科学

②実存理解の次元 人間の実存一般を理解する 哲学

③神の救済の次元 「神の行為」を語る 信仰

・「次元的思考」は、現代社会において宗教を信じる人々が意識的に身につけていくべき態度である。

2 科学と宗教の関係モデル

●3つの類型：科学と宗教の問題を考える際の理論的可能性¹¹

A 対立 / 一致 両者を、同一の対象に関わる異なった営みとしてとらえる。双方の見解によって、対立したり一致したりする。

(ex.) ガリレオ裁判 (1616・1633)¹² / モンキー裁判 (1925)¹³

B 独立 両者を、異なった対象にかかわる次元的に区別された営みとしてとらえる。見かけ上はどうあれ、実際には両者が直接対立したり一致したりすることはない。

⁸ 「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて「霊」が鳩のように御自分に降ってくるのを、ご覧になった。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』という声が、天から聞こえた。それから、「霊」はイエスを荒野に送り出した。イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。」(『聖書』新共同訳、日本聖書協会、マルコによる福音書1章9-13節)

⁹ M. ハイデッガー『存在と時間』細谷貞夫訳、ちくま学芸文庫、1994年(ほか訳書多数)。

¹⁰ 「不安という基礎の上に、自己自身への関心(Sorge)のうちにあって、現存在史的(geschichtlich)に実存する人間は、過去と未来との間の決断の瞬間において、目前存在者(Vorhandenen)の世界に、『世人』("man")の世界に、自分を見失うか、或いは、はあらゆる安全さを放棄して、未来のために、顧慮することなく自己を投げだして彼の本来性(Eigentlichkeit)を獲得するかの決断のうちにあるのである！」(ブルトマン『新約聖書と神話論』山岡喜久雄訳、新教出版社、1954年、61頁 ※原語は引用者による補足。Kerygma und Mythos, Band I. Herbert Reich Evangelischer Verlag, 1954, S. 33)

¹¹ 以下の3類型は、I. G. バーバー(注1⑦)の4類型を参考に、それを単純化したものである。

¹² 田中一郎『ガリレオ裁判:400年後の真実』岩波新書、2015年。

¹³ スティーブ・J・グールド『神と科学は共存できるか?』狩野秀之ほか訳、日経BP社、2007年。特に第3章3。

青木保憲『アメリカ福音派の歴史：聖書信仰にみるアメリカ人のアイデンティティ』明石書店、2012年。特に第2章。

(ex.) ガリレオ¹⁴／ダーウィン¹⁵／カント¹⁶

C 統合 次元的区別を前提としながらも、両者の関わりにより強調点をおく。魅力的である反面、危険性もともなう

(ex.) テイヤール・ド・シャルダン¹⁷／ホワイトヘッド¹⁸／プロセス神学¹⁹／モルトマン²⁰／パネンベルク²¹／野呂芳男²²

・ブルトマン以後のキリスト教神学では、科学と宗教の統合への探求が求められていることは確かだが、慎重さが必要である。

①本来証拠なしに信ずべきものを自然科学的な考察による裏づけによって証明しようという欲求につながっていくのではないか（宗教の側から）²³。

②自然科学の側から見れば、明確な実証的根拠を持たない宗教的な信仰が、自然科学の研究に介入することになるのではないか。

3 現代科学における次元的相違

●ドーキンス (Richard Dawkins 1941-) 「A 対立」のモデルで宗教と科学の関係をとらえている。

・神仮説（宇宙と人間を含めてその内部にあるすべてのものを意識的に設計し、創造した超人間的・超自然的な知性が存在する）と進化論（何かを設計できるだけの十分な複雑さを備えたいかなる創造的知性も、長期にわたる漸進的進化の単なる最終産物にすぎない）は相いれない。両者を同次元にある異なった説としてとらえている。

引用 6 神の存在は科学の問題²⁴

●ゲールド (Stephen Jay Gould 1941-2002) 「B 独立」のモデルで宗教と科学との関係をとらえている。

・宗教的な信念を科学の学説として提示する動き（創造科学）に反対しつつも、科学の名の下に宗教を否定する

¹⁴ 青木靖三『ガリレオ・ガリレイ』岩波新書、1965年、82頁。田中一郎『ガリレオ裁判』49頁。

¹⁵ ゲールド『神と科学は共存できるか』202-219頁。

¹⁶ カントは理論的理性が原理的に答えることのできない四つの二律背反（アンチノミー）を示す。①宇宙に限りがあるか否か。②空間は無限に分割可能か否か。③自由は存在するか否か。④神は存在するか否か。理論的理性（科学）はこれらの問いを保留するしかない。（イマヌエル・カント『純粹理性批判』（中）原佑訳、平凡社ライブラリー、2005年、193頁以下）しかし、実践理性（道徳）においては、自由、神の存在、魂の不死は保留できない問題となる。すなわち、人間が自由であるためには神の存在と魂の不死の存在が必須となる。このように、神の存在は科学によって「証明」(Beweis) することはできないが、道徳的に生きるために「要請」(Postulat) される。（カント『実践理性批判』篠田英雄訳、岩波文庫、249頁以下、岩波文庫）

¹⁷ T. ド・シャルダン『現象としての人間』みすず書房、1964年。

¹⁸ A. N. ホワイトヘッド『過程と实在』山本誠作訳、松籟社、1979年。

¹⁹ J. カブ／D. R. グリフィン『プロセス神学の展望』延原時行訳、新教出版社、1978年。

Ch. ハーツホーン『自然神学の可能性』大塚実訳、行路社、2002年。

²⁰ パネンベルク『自然と神：自然の神学に向けて』深井智明ほか訳、1999年。

²¹ モルトマン『科学と知恵』蓮實和男ほか訳、新教出版社、2007年。

²² 野呂芳男『キリスト教と開けゆく宇宙』松鶴亭（出版部）1996年。

²³ 復活したイエスに出会ってはじめて信じた弟子のトマスに対して、イエスは「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は幸いである」と言った。（「ヨハネ福音書」20章24-29節）。ゲールドは、この言葉は「信仰と科学との根本的違いを言い当てている」と言う。（ゲールド21頁）

²⁴ 「神が存在するかしないか、それは科学的な疑問である。いつの日か私たちはその答えを知ることができるかもしれず、当面は、その蓋然性についてかなり強い主張をおこなうことができる。」（R.ドーキンス『神は妄想である』早川書房、2007年、76頁）。

こと（ドーキンス）も拒否。科学と宗教を「対立」するのではなく、それぞれ「独立」するものとみなす。

・「NOMA 原理」（Non Overlapping Magisterium = 重複しない教導権）。宗教と科学とは、互いに独立した領域で人々を教え導く能力をもつ。

引用7 グールド HOW と WHY ²⁵

引用8 グールド ダーウィンと NOMA ²⁶

・「NOMA」原理への不満

引用9 「なぜ」を問うてはいけない？（中村桂子 / 上橋菜穂子）²⁷

引用10 「なぜ」の重要性（同上）²⁸

●現代神学 現代神学の流れは「B 独立」から「C 総合」へ移ってきており、とりわけ自然科学出身者による「自然神学再考」の動きが目立つ²⁹。

・A・マクグラス（Alister E. McGrath 1953- ）はドーキンスともグールドとも異なる自分の立場を POMA（Partially Overlapping Magisteria = 部分的に重複する教導権）と呼ぶ³⁰。

・ここでオウム真理事件を再び想起するなら、「なぜ」への問いを失った科学教育には問題があるが、「なぜ」への問いに科学が直接答えを与えることの危険性にも注意をはらうべきであると言わなければならない。

²⁵ 「私たちは『なに』（what）と『いかにして』（how）を知ることができるし、さらには、自然は物質の特性についての不変の法則によって個別の事実を説明するという特別な意味において『なぜ』（why）さえも知ることができる。しかし科学は、すべてを覆いつくす目的や永遠の価値と表現されるような究極の『なぜ』（ultimate why）という疑問には、近く手段さえもっていない。」（グールド『神は科学と共存できるか？』221頁 ※原語は引用者による補足。Gould Rocks of Ages, Science and Religion in the Fullness of Life, Vintage, 2002, p.199-200）。

²⁶ 「ダーウィンは進化を利用して無神論を奨励したわけでも、神という概念は自然の構造とは整合しえないと主張したわけでもなかった。そうではなく、科学のマジステリウム内で理解される自然の事実性は、神の存在や性格、生命の究極的な意味、道徳性の適切な主張など、宗教という別のマジステリウム内の問題を解決できないし、特定することさえできない、と主張したのである。」（グールド『神と科学は共存できるか？』211頁同書、203頁）。

²⁷ 上橋 あるとき山極寿一先生とゴリラの話をしたのですが、私が『なぜこうなのでしょうね、その目的は』と聞いたら『上橋さん、科学者はなぜを問うてはいけないんだよ』と言われました。

中村 『なぜ』は科学の外なんです。What と How しかないのです。科学という学問は、What と How で進めるのですが、科学者自身の気持ちの中にはなぜを入れておいた上で What と How を考えていかなければいけません。今の科学教育はなぜを持つ教育をしていないのです。」（中村桂子 / 上橋菜穂子（対談）「生き物の物語を紡ぐ」JT 生命研究館 <http://www.brh.co.jp/seimeishi/journal/084/talk/>）

²⁸ 「上橋 『なぜ』というののレベルが二つありますね。大きな『なぜ』、総合の『なぜ』。これはやがてもしかしたら神に行きつきそうなので、ちょっとペンディングをしておく。でも心の中に持つておかない限り見ることができない。」

中村 「そう。それなしでやると、とんでもない科学者になると思うのです。だから今問題が起きているところを見ると、心の中に『なぜ』を持たなくなっているからです。科学って What と How ですよって言われたから、それだけやって役に立つ技術を作れば良いと思うわけです。それは間違いです。」（同上）

²⁹ A. E. マクグラス（注1⑦⑩）、ポーキングホーン（注1④⑤）、芦名定道（注1⑨）、稲垣久和（注1①）など。

³⁰ A. E. マクグラス『神は妄想か？ 無神論的原理主義とドーキンスによる神の否定』村岡良彦訳、教文館、51頁。

マクグラスは POMA の主張する一人として、米国のヒトゲノム計画の指導者 F. コリンズを挙げている。コリンズはグールドの立場を満足のいく立場ではないとし、「心の中で科学と信仰が折り合いのつかないまま存在するなら、そのどちらも完全な形で受け入れることができなくなってしまう」と述べている。（F. コリンズ『ゲノムと聖書：科学者、＜神＞について考える』NTT 出版、2008年、5頁）。

まとめ

科学と宗教の次元的な区別は極めて重要。宗教をめぐるトラブルの多くは、この次元的な区別を意識しないところから起こっている。しかし、同時にこのような区別を強く意識しつつも、われわれ人類は科学的な問いと宗教的な問いが重なる部分への関心を抱き続けるべきだし、抱かざるをえない存在である。現代科学が提示する様々な新しい発見は、われわれの常識をくつがえすような新鮮さを持っており、こうした新しい見地が宗教的な問題に何の影響も与えないということとはあり得ない。つまり次元的に異なるものも、間接的な形で関わり合うことができるのではないか。われわれはあくまで次元的な区別を堅持しながらではあるが、異った次元同士がどのように関わり持てるのかを積極的に考えていく時期に来ているように思われる。